
青の袂魔師～紫眼が見つめるモノ～

邪餽 珀磨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青の被魔師〜紫眼が見つめるモノ〜

【Nコード】

N1138X

【作者名】

邪餽 珀磨

【あらすじ】

被魔師エクスシストになると決めて早10年。五十嵐 要はメフィストⅡフェレス卿に頼み、被魔塾に入れてもらう事になった。彼女は、自分の野望のために突き進む。

五十嵐 要

「お久しぶりですね、五十嵐^{いがらし} 要君^{かなめ}。10年ほどでしょうか?」

「お久しぶりです。相変わらずお元気そうですね。……オタク度も上がったみたいですし」

「はあい、お蔭様で」

東京にある『正十字学園』。

その理事長室に、ピエロを想わせる紳士（自称）と白髪で毛先を紫色に染めた子供の姿があった。

「どうしても駄目でしたか? “アレ”では、^{エクソシスト} 被魔師の資格はもらえませんでしたか…」

「はい。“アレ”ができるのは、今のところ要くんだけです。ヴァチカン本部は“アレ”だけで認める訳にはいかない、と言っています」

紳士（自称）の方は、飴と紅茶を楽しみながら話している。

子供の方は、立ったまま溜息をついた。

実は、この子供・五十嵐 要は被魔師になりたくて、ある事を申請していたのだ。

それを日本支部『正十字騎士團』は許可したのだが、本部は許可したのである。

要には、野望があった。

その為には被魔師としての資格を得る事が一番の近道だと思っていたのだ。

だが、それは許否されてしまった。

という事は、要は“アレ”以外を身につけなければならない。

「ボク：“アレ”以外の知識がないんですよ…。あまり気が進まないんですけど、被魔塾に入塾させてもらってもいいですか？」

さびつと言っ。

「気が進まない、とか…そこの最高責任者を目の前にして言う事ではありませんよ。そんなトコロは父親にそっくりですね……」

「うわー。それは最大の脅威ですね、治す努力をします」

今度は紳士（自称）が溜息をつく。
大袈裟に、ヤレヤレ…といった様子で。

紳士（自称）は、口に含んだ飴を噛み砕き、手元の紅茶で流し込んだ。
だ。

そして、一息入れると要を真っ直ぐに見つめて、ゆっくりと口を開いた。

「いいでしょう。入塾を認めます。この鍵を持っていなさい」

「ありがとうございます。では、ボクの荷物は旧学生寮に運んでおきます。そこから通うので、ヨロシクお願いしますね」

「あそこは今、男子生徒が2名宿泊していますが…?」

「構いませんよ」

「……………」

「……………?」

無言で要を見つめるが、当の本人はキョトンとして首を傾げる。
紳士（自称）は、先程よりも深く深く溜息をついた。

「君は…自分が何者か分かっていますか？」

「分かっていますよ。大丈夫ですって、バレないようにしますから」

「君、女の子でしょう？」

「そう…ですけど？」

要には何故、紳士（自称）がそう聞いてくるのかが理解できないでいた。

あちらが、深い溜息をつく度に首を傾げた。

「そんなトコロも父親に似ていますね……」

「うわー…。それは洒落にならないですね。治すように全力を尽くします」

「そうしてください。では、もう行っていいですよ。明日から塾に参加してもらいますので、見学でもしておいてください」

「では、失礼します」

丁寧は頭を下げ、理事長室から出る。

先程もらった鍵を使ったからか、来た時には一度も通らなかった道が目の前に広がっていた。

しばらく歩いていると、気が付けば古い建物の中に入っていた。ひたすら長い廊下に、塾生と想像できる騒ぎ声。

チャイムが鳴ると、講師である被魔師が出て来た。

要の白髪は、薄暗い廊下では目立つらしくすぐに気付かれた。

「どちら様ですか？」

「初めまして。明日から入塾する五十嵐 要です」

「君が…？そうですか、申し遅れました。僕は奥村 雪男、この塾で医療・薬学の講師をしています」

お互いに頭を下げ、挨拶を交わす。

「では、今の内に挨拶を済ませてしまいましょっか」

奥村がそう言うと、調度いい具合に塾生達が教室から出て来た。

「お？誰やアレ」

「うわぁ…子猫さんより小さい子、久々に見たわ」

「おーい、雪男！。そいつ誰だー？」

出て来た塾生達は、警戒する訳でもなくすんなり近付いてくる。中にはヤンキーみたいな少年もいた。

「初めまして。五十嵐 要です。明日から、皆さんと一緒に塾で学ばせていただきます。ヨロシク」

その後、一人一人の自己紹介が終わり、明日からヨロシク、と皆が帰路についた。

理事長室のドアをノックする音。

理事長・メフィスト^{II}フェレスは、ドアの外にいる者を招き入れた。

「失礼します」

「ようこそ、奥村先生」

奥村 雪男は、睨み付けるようにメフィストを見た。

「こんな時期に入塾させるなんて…何を考えているんですか！」

「こんな時期…だからですよ。あの子も承知の上です」

あと一ヶ月もすると、エクスクルーゾア候補生の認定試験が行われる。
もちろん、要も参加する予定だ。

雪男が心配しているのはそんな事じゃない。
要と同じく塾生の、兄・燐の事だ。

「あの子なら大丈夫です。間違っても、殺される事はきわめて低い」

そう説明しても、雪男は納得していない様子だった。

「では、奥村先生にはあの子の監視もお願いします。これは上司命令ですよ」

「く……っ。わか……りました……。失礼しました」

「次回からは電話でお願いしますね」

「……はい」

雪男は、悔しそうに理事長室を去った。

夜も遅く、寮の屋根に登り月を眺める少女が一人。
その体には紫色の炎が燈されている。

「遠いなあ……」

少女の眩きは、暗闇の中に溶けて消えるようだった。

注意書き+

どもども 邪餽です。

この度は『青の被魔師〜紫眼が見つめるモノ〜』を拝読していただき、真にありがとうございます。

この小説では、度々このような休憩を挟みたいと思っています。

と言うのも、終わっていない作品をファンフィクションで書かせてもらうのが初めてでございます。

ですので、原作と違う方向に向かうかもしれません…。それでもお付き合いしてくれる方…感謝感激雨霰！！

てな具合で物語を進めて行きたいと思えます。感想や評価、アイデア等ありましたら遠慮なく…あ、もちろん、誤字脱字の注意でも構いません。

オリジナルの悪魔も出る予定ですが、もしかしたら原作とはかけ離れたものになるかもしれません。

では、次の回でお会いしましょうー

奥村 燐

「ちよおおっと、待てええ!!」

あれ?どうしたの?

奥村 燐

「『どうしたの?』じゃねえ!なんだよ!話の、俺の台詞!あれだ
けか!」

なんだ…文句かよ。

お前、主人公じゃないんだからしょうがないだろ。

奥村 燐

「は？俺、主人公じゃねえの！？」

主人公は要だ。

お前を主人公のまま出したら、原作まる写しになるだろうが。

奥村 燐

「でも、少な過ぎんだろ！てか、あれの前に書いてたのあっただろ
！」

あー…あれか……。

あれは、闇に葬った…。

奥村 燐

「うおおお…！あれの時なら沢山台詞あったのに…っ」

メフィスト

「いえ、あれはいけません。私の出番が少な過ぎますからね！」

奥村 燐

「メ、メフィスト！？どっから現れやがった！？」

メフィスト

「ちゃんと玄関から上がって来ましたよ。というか…貴方、また私を呼び捨てにしましたね？私は貴方の上司だと言ったでしょう」

いな…。

子供は注意だけで済んで…。俺なんか、解雇の危機に立たされてるもんな…。

てか、前のやつだとメフィストの扱い名前だけ表記しただけだったもんね…。

メフィスト

「その通り！……ですが、今回のにも不満があります…」

不満…？

はて？不満になるような事、書いたかな…？

メフィスト

「1話の最初の辺り、私の名前を明かさずに表記したアレですよ！」

ちゃんと『紳士』って表記したじゃん。

メフィスト

「そのあとです！()の中に『自称』と入れたでしょう！何度も何

度も…!!」

だって、本当の事だもん。

俺らからしてみれば、メフィストの格好を見て『紳士』と思う奴は
いないと確信してるぞ？

ピエロみたいだし、オタクだし…。

それが嫌だ、って言うから『紳士（自称）』にしたんじゃないか。

メフィスト

「納得できませんね」

そうか…。

じゃあ、メフィストの出番は今回限りだな。

メフィスト

「んな!？」

俺が作者なのを忘れんなよ？

この『青エクス紫眼』では、原作通りになると考えない方が身の
ためだぞ。

では、メフィストも黙ったところで

奥村 燐

「俺の話は終ってねー！」

…はいはい。

じゃあ、次の話では出番多くしてやるよ…。

要の次にな。

奥村 燐

「え？マジ？やったー！」

さて、燐も落ち着いたところで…「これで、お開きにしたいと思います。」

では、またお会いしましょうー

被魔訓練生（前書き）

要くんは“カナメ”と変換しております。

……だって、文章にするとややこしいんだもん……。

被魔訓練生

現在時刻、5:00。

いつもと同じ時刻に目が覚める。

太陽はまだ昇りきっておらず、外は薄暗い…うえに肌寒い。

カナメは学園の生徒ではない。

だが、正十字学園町から出る事は許されていないため、塾に行くまでが暇なのだ。

とりあえず、日課の散歩を始めることにした。

「いい風が吹いてる」

改めて、そう思う。

あと一ヶ月半で夏休み…本格的な夏がやってくる。

春の終わり、夏の始めの風の僅かな違いが分かるくらい、ここの風は『いい風』だった。

「五十嵐さんか？」

東京とは違うイントネーションに振り返る。

そこには、ソフトモヒカンに、真ん中だけ金髪に染めた少年がいた。

「勝呂くん…？どうしたの、こんな朝早く」

「五十嵐さんこそ…」

「ボクは散歩。勝呂くんはジョギング？」

「まあな…」

カナメは『行つてきなよ』と促す。

「ボクは適当に散歩しとくから」

「じゃあ、軽く走って来るわ」

互いに手を振って見送り、別々の方向へ歩き出した。しばらく歩いて、折り返して戻ってきた勝呂と途中まで一緒に帰った。

教室には、カナメを含めて9人と講師である雪男の10人が揃っていた。

それぞれが、好きな場所に座り雪男が話す内容を静かに聞いている。

夏休み前に候補生認定試験があるらしい。

「…そこで来週から一週間、試験のための“強化合宿”を行います」

そう言っつて、皆にプリントを配布する。

プリントには強化合宿の参加と、取得希望“称号”^{マイスター}の記入欄があった。

「全てに記入をして、月曜日までに提出してください…」

カナメは手騎士^{テイマー}と騎士^{ナイト}に印をつける。

もちろん、強化合宿にも参加する。

明日にでも出そうと思ひ、ファイルに閉じて次の授業に備えた。

「なあ、五十嵐……」

「ん？」

「『称号』って何？」

「……………ん？」

何を聞かれるのか、と身構えていたのだが……予想外の質問に返答が遅れてしまった。

目の前の少年は何を言っているのだろうか？
まさか称号を知らない？
そんな人間もいるのか、と首を傾げる。

「んー」と、『称号』は……被魔師に必要な技術の資格の事だよ」

「うん、うん」

「じゃあ、一般的な種類について説明するね」

「ええっ！？被魔師って種類があるのか!？」

大袈裟に驚いた燐との騒ぎに気付いたらしく、数人の少年達が近付いて来た。

真ん中に勝呂、サイドにピンク頭の志摩と坊主頭の三輪の三人だった。

「五十嵐さん、どないしはったん？」

志摩はひらひらと手を振って尋ねる。

「奥村くん『称号』が分からないんだって」

「はあ、!？」

「ボクも無知な方だけど、さすがに『称号』は知ってるから、今教

えてたところなんだ」

カナメは、明らかに苛々している勝呂をなだめるように言った。

「そんなんも知らんで被魔師なるいうてんのか！たいがいにいいや
！」

「まあまあ……。今、5つの『称号』について説明するところだった
し、三輪くんは何にするの？」

どうも燐と勝呂は反発し合うものがあるらしく、いつも喧嘩してる
らしかった。

それを、なんとなく感じていたカナメは、2人が衝突しないように
話を振る。

振られた三輪は、やんわりした口調で言葉を発する。

「僕と志摩さんは『詠唱騎士』目指すんやよ。詠唱騎士というのは、
聖書や経典やらを唱えて戦う称号」

「因みにボクは『手騎士』と『騎士』を希望中。手騎士は悪魔を召
喚して、使い魔として戦う称号ね」

「へー…」

分かっているのか、少し不安になるが説明は続けられる。
というより、志摩が勝呂の希望する『称号』をつい言ってしまったのだ。

勝呂も2つの取得を希望しているらしい。

三輪や志摩と同じく『詠唱騎士』…そして『竜騎士』^{ドラグーン}の2つだ。

それを聞いたからか、燐の瞳が輝きだした。

自分は何にするか…という好奇の現れのようにも思える。

「何にしようかな…」。

ドラグーンてなんだ？」

ドンッ！

と、痺れを切らした勝呂が机を叩いた。

すごく真面目な彼には、構わずにはいられなかったらしかった。

「あゝーもう！

難儀な奴やなあ！！竜騎士は銃火器で戦う称号！

騎士は刀剣で戦う称号…」

「じゃあ俺は騎士だな！」

「刀剣だけじゃなくて、槍とか斧とか…お坊さんならキリクとか使
うみたい」

「へー…」

本当に伝わったのだろうか……？
カナメは、まだ心配だった。

「そーいやさ、雪男から聞いたけど…五十嵐って実戦経験あるんだ
ろ？なんで、すぐに被魔師にならなかったんだ？」

「そうなんか!？」

「…う、うん。申請はしてみたけど、本部がダメって…。それで被
魔塾に入ったんだ」

「ははっ。坊みたいに気合い入ってるもんな。その髪、似合っ
てるよ」

「あ、コレ？染めてるのは毛先だけだよ」

皆が他愛ない話をしている間、それをじっと眺める少女がいた。少女の名前は杜山 しえみ。彼女は今日こそ『友達』を作ろうとしていた。

「これから悪魔を召喚する。図を踏むな……魔法円が破綻すると効果は無効になる」

現在、魔法円・印章術の授業中……。

講師のイゴール「ネイガウスは教室の床に大きく魔法円を描き、そう言って早速悪魔を呼び出す。

呼び出された悪魔が現れた瞬間、教室中に硫黄臭が漂った。

慣れない臭いに、皆の顔が引きつる。

「ナベリウス屍番犬…。相変わらず醜い顔してますね。臭いもキツイ」

「あれが屍番犬か…。…は…初めて見たわ…」

呼び出された悪魔が襲いかかることはなかったが、その異形な姿に警戒しているようだった。

「悪魔を召喚し、使い魔にする事ができる人間は非常に少ない。悪魔を飼い慣らす強靱な精神力もそうだが “天性の才能” が不可欠だからだ」

ネイガウスは、床に描いた魔法円の略図の紙を塾生達に渡す。そして、こう続けた。

「今から、お前達にその “才能” があるかテストする。先程配った紙に、自分の血を垂らして “思いつく言葉” を唱えてみる」

ネイガウスに促され先陣を切ったのは、長い髪を2つに結った神木という少女だった。

「 稲荷神に恐み（かしこみ）恐み白す 」

小さくて白い手には、2枚の略図の紙。
慣れた様子で、2体の白孤を呼び出した。

本人も得意げな様子で、召喚できない生徒達を見ていた。
だが、召喚ができるのが自分だけではないと、思い知らされる。

神木の召喚を目の当たりにした杜山は、召喚の言葉に相応しいか疑問になる程度の呼び出しをする。

「おいで、おいで……なんちゃって……」

そうして現れたのは、緑色の小さな悪魔だった。
すぐに、ネイガウスが緑男の幼生だグリーンマンと告げる。

杜山は、嬉しそうに呼び出した悪魔に『ニーちゃん』と名付けた。

「 我が名に応じ、姿を現せ。我、汝と共に戦う風の者なり 」

ボソリ…と呟くように、悪魔を呼び出す。
カナメが持っていた略図の紙から、小さなつむじ風が現れ、次第に大きくなっていった。

大きくなった風は、速度を落としやがて1体の悪魔が姿を現した。

「うおおお！なんだそれ、でっけえネズミ！！」

「かましたち鎌鼬だよ…。悪魔…というより、妖怪だね」

「流石だ、五十嵐 要…。うむ…今年は手騎士候補が豊作なようだ」
嬉しそうな声で、そう言った。

ネイガウスがそう言ったのも無理はない。
悪魔を操って戦う手騎士は、被魔師の中でも数が少なく貴重な存在だからだ。

天性の才能　つまり、生まれ持った能力、そして強靱な精神力…。
手騎士は、その精神力が要だ。

まず、悪魔は自分より弱い者には決して従わない。
いくら召喚者とはいえ、自信を失くした者には逆に襲いかかるのだ。

「さっきも言ったが、使い魔は魔法円が破綻すれば任を解かれ消えるので…もし、危険を感じたら“紙”で呼んだ場合、紙を破くといだらう」

ネイガウスは自分の魔法円を踏みにじり、屍番犬は消え去った。

それと同時にチャイムが鳴る。

「本日はこれまで」

略図の紙を引き裂くと、神木の白狐、カナメの鎌鼬は姿を消した。

「お前、すつげえな！俺、ぜんっぜん駄目だったぜ」

「んー…召喚は血筋も関係するからね。ボクのは…家系…かな……」

「おおと、お友達になってくださいー!!」

「ん？」

大きな声が聞こえて、そちらに目をやると杜山と神木と朴がいた。端から聞いていると、どうやら杜山が神木に友達になってほしいと頼み込んだらしい…。

だが、何やら様子がおかしい。神木の杜山への扱いが、友達のような平行関係ではない気がした。

それから数日、神木と杜山の“友達ごっこ”は続いていた。そして、ついに強化合宿の日が訪れた。

強化合宿

「なあ……」

「んー？なあに？」

「アレ、完全にパシられてるよな……」

旧正十字学園男子寮。

その玄関先で、他の塾生の到着を待つ奥村兄弟とカナメがいた。

隣がカナメに、ここ数日の杜山の様子の感想を告げる。

雪男は気付いていない様子だったが、カナメは苦笑して頷いていた。

「つーか、寮で合宿って意味あんの？」

「この寮、人がいないから都合がいいんだよ」

「いない!?!」

驚愕する隣に、雪男とカナメが『気付いてなかったの!?!』と驚愕する。

「ここボクらしか住んでないよ？ほぼ貸し切りだね」

「一般生徒はもっと綺麗な新館の方で生活してるよ。……あ、来たね」

向こうから塾生が現れる。

それぞれに旧男子寮の感想を口にしながら…。

神木と杜山の“友達ごっこ”は今日も続いていた。

塾生達に部屋割をし、荷物を置いて広間に集合する。
初日とはいえ、これは“強化合宿”なのだ。その監督を仕切る雪男はやる気満々だった。

むろん、やることは“勉強”である。

「…はい、終了」

夜も更けてきた頃、ようやく雪男から終了の合図が入る。

「明日は6時起床。登校するまでの1時間、答案の質疑応答やりま
す」

「はい」

隣にはオーバーワークだったらしく、頭から湯気を出して外へ歩いて行った。

ケロツとしているのは、神木と勝呂とカナメくらいだった。

疲れているらしい朴に神木がお風呂に誘う。

“お友達”の杜山も反応してついて行った。

「うはは、女子風呂か」。ええな。こら覗いとかなあかんのやな

いんですかね」

「志摩！お前、仮にも坊主やる！」

「そんなん言つて2人とも興味あるくせに〜」

覗きの企みをする志摩に、勝呂と三輪が待ったをかけるも、あまり効果は得られなかった。

「女子の前で、よく声に出して企めるよね」

「あ」

カナメがそう言つと、志摩が固まる。
呆れ顔に隠れきれず、軽蔑の色がはみ出していたからだ。

「大丈夫。言わないでいてあげるよ。…さて、ボクもお風呂に行くっかな〜」

それは、完全に拒否を現していた。

一瞬、空気が凍り付き、しばらく沈黙が続いた…。

「カナメちゃん怖い…」

「お前がアホな事言うからやる！」

廊下を歩く。

少し、違和感を感じながら浴場を目指した。

ふと足を止める。

つい最近に嗅いだことのある臭いに気付いた。

急いで踵を返し、雪男のもとへ走る。

同時に女子の悲鳴。

カナメの推測が確信に変わった。

「奥村先生！^{グール}屍系の悪魔が…！杜山さんと神木さんと朴さんが危険です…！」

「なんですって!?!」

「急いでください!」

「分かりました。すぐ行きます!」

雪男は対・悪魔用の拳銃を手に、急いで広間を出て行った。
勝呂達もつられて駆け出した。

広間に残ったカナメは、誰かに声をかけた。

『何の遊びですか?』との問い掛けに、返事はなかった…。

「なるほど…ね」

そう呟いて、雪男達の後を追うように走り出した。

「あの子の勘もたいしたものですな。流石、あの男の娘だ！」

カナメが浴場に辿り着いた時には、既に事は済んだ後だった。魔障を受けて倒れる朴以外、怪我をしている人間は見当たらなかった。

その朴も、杜山の処置を受け、死を免れていた。

「勝呂くん、朴さんを部屋まで運ぼう。志摩くんには任せられない

…」

「カナメちゃん怖い…」

「……………」

現在、13:05。

本日、平日……つまり、寝坊。

「……あゝ……」

目を擦り、顔を洗いに洗面所に向かう。

見事なまでに跳びはねた髪を手ぐしで直す。

「んー……。奥村先生、怒ってるかなあ……」

どうせ怒られるなら、とことんのんびりしてやるっ。

日課の散歩をしながら、歩いて塾へ向かう。

塾に辿り着いたのは、聖書：経典暗唱術の授業が終了したあとだった。

教室に入ると、何やら揉めているようだった。

「川の……っ」

カナメの目に映ったのは、勝呂が神木の胸ぐらを掴んだ瞬間だった。

「待って！」

カナメの制止も叶わず、反射的に出た腕は、間にいた燐に命中した。ただ……運悪く、その場に現れた雪男に見つかってしまった…。

夕暮れ時、寮の一室に集められた塾生達は正座をさせられ、その足には人面岩の悪魔が乗せられた。

この悪魔、時間が経つと共にどんどん重くなっていく…。

「皆さん、少しは反省しましたか」

雪男は呆れた様子で尋ねる。

志摩は、自分達にも罰が与えられているのか不思議なようだった。それについては、雪男が『連帯責任です』と答えた。

「それに…五十嵐さん、時間は守ってください」

「すみません…」

「この合宿の目的は“学力強化”ともう一つ“塾生同士の交友を深める”っていうのもあるんですよ」

溜息混じりに言うが、神木は反発する。
再び揉めだすかとも思えたが、雪男の言葉でそれもなくなった。

「馴れ合ってもらわなければ困る。被魔師は、1人では闘えない！」

基本、被魔師は2人以上の班パーティーで闘う。

お互いの特性を活かし、欠点を補うためだ。

実戦中、仲間割れなどすれば今より更に重い連帯責任を負わされる。
運が悪ければ、死ぬことだってさえ有り得る。

「……では僕は、今から3時間ほど小さな任務で外します。……ですが、昨日の屍の件もあるので念のため、この寮全ての外に繋がる出入口に施錠し、強力な魔避けを施しておきます」

「あの……まさか、3時間このままですか……？」

「はい。“皆で仲良く”頭を冷やしてください」

脳裏に浮かんだ悪魔のような一言を、雪男はニッコリと微笑んで口にした。

その背後には、僅かな怒りが見え隠れしているようだった。

「うわー…鬼だな……」

「お前とあの先生、ほんま血イつなごうとるんか」

「…ほ…本当はいい奴なんだ…きっとそうだ」

さて、カナメがあることに気付く。

あの臭いが、漂っているのだ…。

そして、この部屋にも若干の違和感を感じ取っていた。
人の気配が多過ぎる…。

「つーか、誰かさんのおかげでエライめえや」

「はあ？あんだだってあたしの胸ぐら掴んだでしょ！？」

「先にケンカ売ってきたのはそつちやる！」

「ケンカしてる場合じゃないかもよ」

「「は？」」

カナメの忠告に、2人は首を傾げる。と同時に部屋の明かりが消えた。

一瞬の出来事に驚き、皆混乱する。

その混乱を打ち消すように、志摩が携帯を開き明かりを点した。

真似するように、それぞれ自分の携帯を開いていく。

少しは明るくなったことで落ち着いたようだ。

「停電…!?!」

「いや窓の外は明かりがついてる」

「停電はこの建物だけってことか…?」

志摩は立ち上がり、ドアへと向かう。

「フッフ。俺こういうハプニング、ワクワクする性質たちなんやよ。
リアル肝試し……………」

少し傷んだドアは、掠れたような音をあげながらゆっくりと開いていく。

「……………」

携帯の僅かな明かりに照らされた物体を目の当たりにし、ゆっくりとドアを閉めた。

それは、明らかに人間ではなかった。

「…なんやろ、目エ悪なつたかな…」

「現実や現実！！！！」

「志摩くん！逃げて！！」

うおおお！と、声に出しながら跳びはねるように逃げる。

同時に、人間ではない腕がドアを突き破った。

獣のような気味が悪い声を発しながら、硫黄臭を撒き散らして屍ケールが現れる。

その姿は、継ぎ接ぎだらけの顔や体をしており、頭の横にはもう1つ継ぎ接ぎされた頭のようなものが生えていた。

更に、その後ろからもう1体の別の屍……………。

「昨日の屍…!!」

「魔除け張ったんやなかったん!？」

その大きさからするに、おそらく中級以上の悪魔だと思われる。それが2体も現れ、足も痺れて動けない。

屍は、継ぎ接ぎの糸を自らちぎるように頭を膨らませる。ボンツ、という音と共に体液を振り撒き、塾生達にそれを浴びせた。

「ニーちゃん…!ウナウナくんを出せる?」

杜山の問いに応えるように、使い魔のニーちゃんはその小さな体から巨大な大木をバリケードのように張り巡らせた。

「す…すげえ…」

「ありがとね、ニーちゃん!」

バリケードのおかげで、悪魔がすぐに襲いかかることはないが、ほとんどの塾生達が体の不調を訴えた。

原因は、先程の屍の体液。

これが体にかかる、風邪に似た症状になる。

問題なのは、これで杜山の体力が尽きれば、目の前の木のバリケードが消えてしまう…ということ。

「すごい勢いでこっち来てる…！」

「屍は暗闇で活発化する悪魔やからな…」

カナメは体液を被っていたが、皆のように体調不良にはなっていなかった。

隣も同じだったようで、バキバキと音をさせながら近付いてくる屍を見つめていた。

「俺が、外に出て罠になる。2匹ともうまく俺について来たら、何とか逃げろ」

「奥村くん…!?!」

「…ついて来なかったら、どうにか助け呼べねーか明るくできねーかとかやってみるわ」

勝呂が制止するが燐は聞く耳持たず、入り組んだ木のバリケードを進んで行った。

「バツ、おいッ！奥村！戻ってこい！！」

無謀とも言える行動。

下手をしたら死んでしまうかもしれない。

被魔師になる前に、死ぬのは避けたいはずなのに、燐は迷わず進んで行く。

「…てめーらの目的は俺たる！来い！！」

屍は不気味な声を張り上げる。その体は2つに裂けていく…。

「分裂！？」

燐について行ったのは分裂した片方だけ…。

結局、2体の屍がその場に残っていた。

そして、杜山の疲労も見て取れた。

このまま…という訳にはいかない状況。

「…ボクも行って来る」

「はア！？何言うとするんや！五十嵐さんまで奥村みたいなバカの真似せんでええ！！」

「大丈夫。ボク、経験者だし勝算はあるから…」

「1体でも減れば、皆の生存率も上がる。」

“奥村くんも同じ事を考えてたのかな…” などと思いながら、木のバリケードを進む。

「コラッ！帰ってこい！」

「……もし、もう1体残ったら…勝呂くん、頼むからね。皆を守って…！」

「五十嵐……」

「さあ、来い！」

カナメの声に気付いた屍が、走り行く背中を追いかける。数は1体…。

「くそ……。やっぱり、誰か操ってるな……」

体は頑丈で力もある。

だが、知性はない。いわゆる、筋肉バカである。

しかし、カナメと燐を追う屍は違う。

エサを目の前にして、追うやつと残るやつに別れて行動している。

本来なら燐が出て行った瞬間、全ての屍が追っていたはずである。

「母なる海より生まれし火炎、我が名に応じ出よ」……不知火しんがき！」

皆のいる部屋から遠く離れた場所に着くなり、召喚を行う。

不知火と呼ばれたソレは、カナメの手の平の上でゆらゆらと揺れていた。

不知火の眷属は『火』。

『腐』の眷属である屍の弱点でもある。

カナメの言っていた“勝算”とは、この事だった。

「君の力を少し借りるね」

カナメはそう言って、不知火を体の中へと吸収させていく。

完全に入った瞬間、カナメの体に炎が燈った。
朱い炎…それは、不知火の炎と同じ色だった。

「さて…君程度ならこのくらいで調度いいかな。日本では許された
『称号』だし、使っても文句はないはずだ」

更に、カナメは鎌鼬も召喚して体に取り込んだ。

カナメの腕は、手首から先が刀身へと変化していた。

朱く燃える剣に怯えた様子で、追っていた屍の動きが止まる。

その隙を逃さず、次の瞬間には屍の体は2つに裂かれ、炎上していった。

『称号』

紅い空。父親の後ろ姿。

生まれて初めて見た景色、人…。その全てが『恐怖』だった。

幼いながらにして、そう感じたのは母親の血のせいだろうか。

ただ、そのおかげで髪は白くなり、二度と黒髪は生えなくなった。

自分が何者か知った時、心に決めた事がある。

現在、その第1段階を進んでいるところだ。

母親と同じ被魔師になる事。そうなった上で、父親と再会する事。

そのためにも、目の前の敵を速攻に片付けなくてはならない。
父親のおかげで身につけた、自分だけが持つ『称号』。

カナメはそれを『憑依騎士^{スレリット}』と呼んだ。

一方、残った塾生達は…。

「うわ〜！〜！とうとうここまで来た！」

屍は木のバリケードを徐々に削り、ついには片腕を出しすぐそこまで来ていた。

だが、今まで何もしていなかった訳ではない。

屍が近付いて来る間、ずっと詠唱を唱えていた。

悪魔には“致死節”という弱点があり、屍系の悪魔は“ヨハネ伝福音書”に致死節が集中している。

全部で二十一章。

それを全て暗記している勝呂が、詠唱で倒すと提案したのだ。

一章から十章まで暗記している三輪と共に、詠唱を続けていると聞こるだ。

既に最終章に入っている。

「奥村くん達どないならはったろ…」

「か…考えたないなあ」

戻らない2人が心配になり、三輪と志摩が呟いた。

その横で、杜山が倒れる。

力尽きたらしく、屍の侵入を拒んでいたバリケードが消え去ってしまった。

志摩は、万が一のために取り出していたキリクを構え、屍よりも先にその体をついた。

「…“ 稲荷神に恐み恐み白す…!”」

神木が2体の白孤を召喚する。

屍は、自分を殺そうとしている勝呂に一直線に向かっていた。そこに2体の白孤の術が決まる。

「やった…!?!」

そう簡単にはいかない。

一瞬の足止めにはしかなかった。

勝呂はまだ、詠唱を止めていなかったのが幸이었다。

屍は獣が苦しんでいるような声ん張り上げ、勝呂の頭を掴んだ。

それでも、詠唱を止めることはなかった。

あと少しで唱え終える。

悪魔を目の前にして、さぞかし恐ろしいだろう…。

それでも詠唱を続ける勝呂へ、天からの助けか、はたまた神の悪戯か…。

「電気が…!!」

明るくなった部屋に、一番とまでついていたのは屍だ。

勝呂を持ち上げていた腕の力が弱まった。

「…その録すところの書を載するに 耐えざらん!!!!」

全てを唱え終えると、屍の姿形は跡形もなく消え去っていた。

勝呂はしばらく震えていた。

「意味分かんねーよ！」

そして、カナメの方にも変化があった。
召喚した2体の使い魔を消滅させ、燃え尽きて炭になった屍の残骸を冷ややかな視線で見つめている。

「……皆、大丈夫かな。死んでないといいな……」

だらりと力が抜けた様子で、炭になった屍を踏み付けて前に進む。
久々の自分の能力に疲れたようだ。体を動かしているというのに、
睡魔がカナメを襲う。

しばらく進んでいると、廊下に明かりが点った。
燐の方が上手くやったのだと感じいた。

不意に笑みがこぼれた。

「流石だなあ……」

そう呟いて、ふと顔を上げるとドアが壊れた部屋があった。
その中から勝呂と燐の声が聞こえる。

どうやら無事だったようだ……。

「ただいま……」

倒れている燐を見て、目を白黒させている他の塾生達を見て、笑顔
を作っている。

「よかった、皆も無事……だっ……た……」

姿を確認して安心したのか、カナメは膝から崩れた。

「カナメッ!？」

完全に崩れ落ちる直前に受け止められる。
その後から、カナメの意識は遠退いていった。

「……………」

「目エ覚めたか？」

「……………んー…」

カナメは目を擦りながら体を起こした。
すぐ隣に勝呂がいる。

「あ、試験終わった…？」

「知つとつたんか!？」

「なんとなく…。人の気配は多いし、あの屍は確実に操られてるし…あの理事長なら考えそうな事だし」

カナメが辺りを見渡すと、誰もいなかった。

窓の外も暗闇に包まれていたし、時計の針は1時を表している。

「待っていてくれたの…？」

勝呂に尋ねる。

本人は顔を背けながら、少し照れた様子で頷いた。

「な、何笑オとるんや!」

思わず笑ってしまい、勝呂に注意される。
カナメは、謝りながらも笑っていた。

「ごめん…つい…」

「笑うな!」

「ちが…っ……嬉しくて、つい………」

笑いが止まらず、涙まで出る始末。
勝呂も諦めたように溜息をついて、カナメの頭を撫でた。

「頑張ったな…カナメ」

「ありがとう」

「アインス、ツヴァイ、ドライ」

ポン！と垂れ幕やらクラッカーやら紙吹雪やらが飛び、白にピンクを合わせたスーツの理事長がお祝いの言葉を言った。

「無事全員、候補生昇格…！おめでと〜ございま〜す」

ということとで…と続け、もんじゃを御馳走すると皆を案内して行った。

正十字学園町にある駄菓子屋さん。

メフィストはチーズ豚もちもんじゃを頼むと、団扇を片手に外へ出る。

そこで待っていた雪男と何やら話し込む。

雪男の表情は険しく、怒っているように見えた。

「奥村先生、飲み物何にするのかな？」

「先生エ、ラムネでええですかあ？」

「はい。じゃあ、ラムネで。五十嵐さんはいいんですか？」

カナメは『猫舌なので…』と言って、雪男とすれ違う。

外に出ると、メフィストはどこかに電話を掛けていた。

「……操り人形ネイガウスに手引きさせる。詳しいことはまた後だ。いいな……」

話は終わったらしく、携帯を袂たもとにしまう。

ラムネを持ってメフィストに近付くと、逆に声をかけられた。

「久々の“憑依”ちからは疲れましたか」

「はい。……それに、嫌な夢も見ました」

「ほう……。父親の夢でも？それとも虚無界ゲヘナの……？」

「どちらも、ですよ。……それと、ネイガウス先生にもボクの事を話しましたね？」

「ええ。でも、安心してください。君の事を知ってるのは奥村先生

と私だけになりましたから」

「それはそうと……もんじゃ、既に食べられていますよ？」

「え……ちょ……待！！貴方たち！？」

折角教えてあげたのに…。

と思うカナメに礼もなく、メフィストは好物のチーズ豚もちもんじやを死守するべく、人間離れの意地を見せつけていた。

「いい風だなあ」

カナメは、チリリンと鳴る風鈴の音色に耳を傾けてそう言った。

『称号』（後書き）

次は休憩（雑談）です。

お茶会（サボリ）（前書き）

ようやく2巻の内容を書き終えたので
ここいらで、しばしの休息…

お茶会（サボリ）

はいはい。

お久しぶりです、作者でーツす

皆様に読んでいただいて、本当に嬉しい限りです。

早速出ました。

カナメの能力！憑依です！

些か『いや…これ、無理あるだろう』とか言われつつ書きちゃいました。

え？

誰に……って？

誰でもないですけど。

もう1人の自分とですよ。

俺が邪魄なら、奴は珀磨ですよ！

奥村 燐

「何、熱くなってるんだよ」

つい…。

文章力ないからか、感想1通もないんだもの……。

俺、淋しくて。

奥村 燐

「あ、そーだ！おい、お前！！」

お前とはなんだ失礼な！

これでも作者だぞ！

文章力低いが作者だぞ！

奥村 燐

「んなことはどーでもいいんだよ！なんで、元々の主人公の俺より、勝呂の方が出番が多いんだよ！！」

…あ？

なんだ、そんな事が……。

奥村 燐

「そんな事じゃねー！なんで俺の勇姿を書かねーんだ！？」

勝呂 竜士

「奥村なんかよりは、俺の方がええ男やからやろ」

奥村 燐

「おわっ！？ちょ、お前！どこから湧いて出てきやがった！！」

勝呂 竜士

「人を虫ケラみたいに言うなや！ちゃんと、玄関から上がったわ！！」

わー…。

なんか、前日も同じようなのを見た気がする。

燐の質問、あえて言うなら文句のことだけど、しょうがないから我慢しろ。

奥村 燐

「えー、なんでだよ！？」

しょうがないだろ。

元々、カナメと勝呂ラブ×2計画を基に書きはじめられたんだから。お前には、しえみがいるからいーじゃん。

勝呂 竜士

「ブフォッ…！！？」

奥村 燐

「あー…邪醜って、勝呂好き？」

いや？

付き合うまでいかない部類かな。
俺が好きなのは、勝呂の中の人。

奥村 燐

「俺はー？」

えー。

お前は止めとくよー。

てか、中の人なら雪男の方が好きだもの。

勝呂 竜士

「ちよつと待て！話がそれとる！お前の出番の話やなかったんか？
！」

奥村 燐

「そーだった！なあ、もう少し増やしてくれよー。五十嵐と勝呂の
次でいいから」

はいはい。

一応、検討してみましょ。

奥村 燐

「軽っ!?!」

さて、ここでカナメに質問コーナー!

Q:五十嵐 要 という名前についてどう思いますか?

五十嵐 要

「なんか…男の子みたいな名前だなく、と…」

はい、その通り

最初は、男の子の予定でした。そこは珀磨と揉めまして……。

Q:両親は何の仕事をしていますか?

五十嵐 要

「母さんは被魔師でした。もう亡くなってます。父親は今、何をしてるか知りません」

Q:毛先だけを染めたのはどうしてですか?

五十嵐 要

「髪全体を紫に染めたけど、白髪の伸びるスピードが早過ぎて……。毛先を染めたんじゃないやなくて、全体を染めた跡なんです」

Q：なんか早速、勝呂が“カナメ”と呼んでいますか……？

五十嵐 要

「嫌じゃないですよ。朝の散歩中にも仲良くしてますから」

ラブには程遠いな…。

勝呂 竜士

「お前から作者に質問はないんか？」

五十嵐 要

「んー…じゃあ、なんでこの小説をUPしたんですか？」

ほら、少し前にモ〇ゲーで青エクのゲーム出たでしょ？

あれをやり始めて、“あ、こんないいかも”てな感じで書き始めたのがきっかけ。

俺の相棒は勝呂パートナーだぜ。

勝呂 竜士

「げエ………」

あ、その内2人には班を組ん^{パーティー}でもらうから。
そこでラブ率を上げる予定だ！！

では、そろそろこの辺で失礼させていただきます。

またお会いしましょうー

来客（前書き）

これから、少しずつ更新が遅れていくかもしれません。できるだけ早く更新できるように頑張りますので、お付き合いいただけても嬉しいです。

来客

紅い空。父親の背中。

人間が住む物質界アッシャーではなく、悪魔が住む虚無界ゲヘナの風景。

カナメは恐怖で何も言えなかった。

目の前にいるのが父親であることさえ、嘘じゃないかと思いましたが。

だが、それは現実で、抗うことが出来ない現実。

『お前は私の子。お前は……の……だ』

「違っっ！」

自分の声に驚いて飛び起きる。
乱れた髪をかき上げて、頬の汗を拭った。とても冷たい汗に、ドキ
リとする。

「また、あの夢か……」

「また故郷の夢ですか？」

「あんな所、故郷なんかじゃないですよ……
……って、何してるんですか？理事長」

「スト2です」

「誰も“何のゲームしてるか”なんて聞いてません。“何でココ
にいるのか”と聞いてるんです……」

部屋には絶対ないゲームの山と、それに埋もれる白い紳士服の理事
長。

カナメは叫び声の代わりに、呆れ声で理事長に尋ねた。

理事長・メフィストは、紙切れを渡す。

「その紙に書いてある場所まで行ってください」

その紙には、地図のようなものが書かれていた。

カナメは首を捻る。

「何故？」

「候補生エクスワイアの初仕事とでも思っていてくれればいいですよ」

「初仕事が『お遣い』ですか……」

「はい。頑張ってきてください」

見事に波〇拳を決めて勝利を掴み取ったのか、メフィストは飛び切りの笑顔で振り向いた。

カナメは溜息と共に承諾し、地図の場所へと向かうことにした。

地図の場所は正十字学園町の中ではあったが、理事長使用の特別な鍵が必要な所のようにだった。

「…めんどうくさいなあ」

「……………」

「どうも」

「……………帰ります」

カナメはげんなりした様子だった。
目の前の男が何者か知っていたからである。

「いいんですか。兄上に怒られますよー」

「うー…」

メフィストによく似た目つきをした男は、踵を返したカナメを足止めする。

『お遣い』…墓、初仕事を放り投げれば罰を受けるのは間違いない。カナメは、しぶしぶ足を止め、再び踵を返した。

「理事長の結界でここには入れないはずでしょう。何故、こんな所にいるんですか…」

「兄上の知人に手引きしてもらいました」

「…何を考えてるんだか」

「ボクにも分かりません」

とりあえず携帯を取り出し、メフィストに電話をかける。
長いコールの後、ようやく電話が繋がった。

『なんですか？』

どうやらゲームで負けたらしい。

第一声には怒りが込められていた。

「ボクに当たらないでくださいよ……。弟さんに会いました。これから、どうすればいいんですか？」

『あー。鍵を使って私の部屋まで案内してください』

メフィストは一方的に電話を切る。

「じゃあ、理事長の所まで案内します。ボクから離れないようにしてください」

「分かりましたー」

そう言ったものの、男は敷地内を動き回る。

仕方なく、メフィストから事前に受け取っていた飴玉を撒きながら進んだ。

男は、それを拾いながらついて来た。

「失礼します」

鍵を使い、ドアを開けるといつもの理事長室が広がっていた。

少し違うのは、不機嫌な理事長の姿くらいだ。

「また負けたんですか…」

「お久しぶりです、兄上」

明らか苛々した様子のメフィストに、恐れなしに声をかける。

カナメが『大人げない』と呟くと、それを否定するかのようにジェントルマンになりきり始めた。

「ようこそ、我が弟・アマイモンよ…。その口に含まれた飴玉の味はいかがかな？」

「ハイ、とっても美味しいです」

早速、挨拶を済ませると窓際まで移動する。

そこからは、道路と大きな猫の姿が見えていた。

男：基、アマイモンは指で輪を作り、それを覗くような格好で外の風景を眺めていた。

大きな猫の側には、何人かの人間がいて、見慣れた姿を発見する。

「奥村くん!？」

「おや、もう帰ったのかと思っていました。君も彼の“力”が気になりますか」

燐と雪男が前に出た。

やがて、大きな猫と燐に何かあったらしく、猫の方が先に倒れた。

メフィストとアマイモンはつまらなそうに眺めているが、カナメは違った。

燐らしくて面白い、と思ったのだ。

「いいえ。彼の“力”は本物ですよ。∴今回は違いましたけどね」

メフィストは、ニィ…と笑う。

「なるほど。では、今回の仕事は終わりです。」苦労様でした」

「じゃあ、また今度…」

「ハイ。さよなら、カナメ」

理事長室を出て、帰路をたどる。
今日は休日なためか、見るのは被魔師の格好をした人間だけ…。

町に出れば他にも人はいるのだろうが、そんな気にはなりそうにも
なかった。

「嫌な風…埃っぽい…」

そう呟くと、あの夢を思い出した。

紅い空と父親の背中…。

カナメの初めての記憶。

まだ、自分が普通の人間ではないと思いついた頃…幼い記
憶。

足が止まる。

「…どうして、ボクなんだろう……」

夢の中で、父親が言っていた…。

『お前は選ばれた』。

意味はまだ、よく分からない。

「あ、課題まだだった」

ふと、明日の事を思い浮かべる。雪男に出された課題があったのを思い出した。

カナメは、今まで考えていた事は殆ど放り投げて、自分が寝泊まりする寮へと急ぐのだった。

数日後、候補生達が遊園地に集合させられた。任務らしいが、内容はまだ知らされていない。

「…まあ、コイツは置いていて」

「オイ！嘘じゃねーんだぞ？」

「俺はあいつらまで候補生に上がりよったのが納得いかんわ！」

勝呂が言う“あいつら”とは、前に認定試験で何もしなかった山田と宝の事だ。

山田は常にフードを被り、手にはゲーム機がある。

宝は普段は無口…というより喋らない。手にはピンクのつぎぎの人物を持っていて、時々、腹話術で話したりする。

どう見ても、真面目には見えないのだ。

「そーいや、お前はどーだったんだ？」

「ボクはお客を理事長の所まで案内しただけ」

「そんなもんかー」

「それより…他の2人は？」

そう。

この場には神木と杜山の姿がない。
何かの理由で遅れている…らしい。

何をしてるのかと、予想するよりも前に杜山の声が聞こえた。

「すみません！遅れました…！！」

「し、しえみ！？どうした？」

遅れて現れた杜山に、燐が驚いた様子で尋ねた。

驚くのも無理はない。

杜山は、いつもの着物ではなく、正十字学園の制服を着ていたのだ。

その意外な姿に、一同言葉を忘れる。

「着物は任務に不向きだからって…理事長さんに支給していただいたの…」

それで、学園まで行って神木と朴に制服の着方を教わっていたらしい。

ネクタイは結び方が覚えられず、蝶々結びになっていた。

「へ…変じゃないかな？」

杜山は少し恥ずかしげに尋ねた。

元々赤い顔に赤みが増しているように見えた。

「えーよ、えーよ！杜山さんかわえーよ」

志摩がいつもの調子で声をかけると、杜山の顔もみるみる赤くなっていく。

お礼を言った声が震えていた。

「えーでは、全員揃ったところで組分けを発表します。まず、三輪・宝。山田・勝呂。奥村・杜山。神木・志摩。…五十嵐さんは1人でお願いします」

それぞれ文句があつたが、雪男は完全無視して話を続けた。

「今回はここ…正十字学園遊園地 通称『メツファイランド』内に^{ゴースト}霊の目撃・被害の報告が入ったため、候補生の皆さんにその搜索を手伝ってもらいます」

ゴースト
霊とは、人や動物などの死体から揮発した物質に憑依する悪魔で、性質は死体の生前の感情に引きずられる特徴を持っている。

今回の対象になっている霊は、メッフィーランド内のいたる所で目撃されている。

しかし、出現場所を特定できないタイプで、浮遊霊の類だと思われる。

外見特徴は“小さな男の子”で共通している。

被害はまだ軽いが、このまま放置すれば悪質化する恐れがあるという。

「先程の組分けで方々に散り、日暮れまでの発見を目指します。見つけたらすぐ、僕が椿先生の携帯に連絡すること。

……では、他に質問がなければ 以上、解散！」

組分けされた4組は、園内に入って行きバラバラに散っていく。

カナメは埃っぽい風に咳込みながら、1人で園内に向かう。

「なんだか…嫌な予感がする…」

とりあえず、泣き声がする方へ歩いて向かうことにした。
進む度に騒がしくなる事に首を傾げていた。

メフィストの像の前まで来ると、誰かが揉めているようだった。

「奥村くん？」

「い、五十嵐…！？」

驚いて振り返った燐が見ていたのは、燐の刀を奪い取ったアマイモンの姿だった。
アマイモンは燐の刀に興味津津な様子で、その鞘を引き抜こうとしていた。

「や、やめろ…！」

燐の制止も意味なく、アマイモンは完全に引き抜いてしまった。
それと同時に、燐の体から青い炎が噴き出す。

「返せ…！」

奪い返すつもりで飛び掛かるが、着地点が悪かったらしくメフィスト像の首が崩れ落ちる。

「「あー理事長（兄上）の首が」」

カナメとアマイモンの声がカブった。
そこでようやくカナメの存在を思い出す。

「五十嵐…お、俺……」

「大丈夫だよ。ほら、早く取り返さなくちゃ」

「そつだ！…てめえ、まじで何が目的だよ！」

扱いやすいなー…。

そう思うカナメの言葉にのせられて、アマイモンに視線を移した。

アマイモンは遊んでいるように燐を呼ぶ。

それは挑発に近かった。

「鬼さん、こーちら 手ーの鳴ーるほーおへ」

アマイモンは“G O T O H E L L”の看板があるジェットコースターをよじ登る。

それを追う燐を待ち構え、デコピンで弾き飛ばす。

「わー…。壊しちゃったー…理事長、怒るだろうなあ……」

瓦礫と紛れて、燐は落とされ、アマイモンは落ちる燐に拳を喰らわしていく。

燐は抵抗できず…額からは血も出ていた。

燐がキれるのは時間の問題だった。

「ガアアア!!」

まるで獣のように、アマイモンに逆襲する。地面に着いた瞬間から燐の暴走が始まった。

アマイモンを投げ飛ばし、更に押し倒して炎を放出させる。

肌が焼けていくのに恐怖を感じるはずなのに、アマイモンは笑っていた。

「我が名に応じ、姿を現せ。我、汝と共に戦いし風の者なり”

憑依・鎌鼬!!」

アマイモンが起こした地震に足を取られ、上から降ってくる瓦礫から避け損ねた杜山の援護に回る。

杜山の使い魔も、護ろうと大木を出そうとするが間に合いそうにもない。

「杜山さん、伏せて！ “風雅！”」

「助けて！」

カナメに言われた通りに体を伏せる。
恐怖が強かったらしく、杜山は思わず助けを求めた。

鎌鼬の能力で起こした風で、少しは瓦礫の落下を減らしていたが、
杜山の声で燐の暴走が止まった。

ただ、杜山を助けたい一心で青い炎を瓦礫に向ける。
カナメの風の援護もあつてか、炎は大きな渦となって瓦礫を燃やし
尽くした。

「杜山さん、大丈夫だった!？」

「…え？」

「大丈夫みただね。じゃ、ボク行ってくるから！奥村先生に連絡
してて!!」

まだ呆然としている杜山に声をかける。
あまり耳に入っていない様子だが、大丈夫だろうとその場を離れる。

向かうのは、落ち着きを取り戻した燐と退屈してきたアマイモンの所だ。

「邪魔だなあ」

アマイモンの眩きが聞こえるくらいの所まで来ると、人が1人増えている事に気付いた。

「邪魔はお前だ」

アマイモンは無言だが、どう動くか分からない状態だった。

「もうすぐ人がきますよ？降魔剣を奥村くんに返してください」

「……では、またの機会に……」

アマイモンは剣を鞘に納めると、燐に向かって投げ返した。そして、ぴょん、と飛び去って行った。

「待てコラ！……お前、余計な事を……！おい！その尻尾は隠しておけよ……」

炎も治まり、疲れがでたのか憐はしばらく呆然としていた。
言われた通りに尻尾は隠して、何かを考えているようにも見えた。

少し後に杜山も駆け付け、その後から雪男が椿を連れて駆け付けた。

「大丈夫ですか!？」

「遅えぞ雪男」

アマイモンを追いかけに行っただけの人間が戻って来ていた。
それが山田だとすぐ気付いたが、声が女性なのに疑問を感じる。

一気にフードを脱ぎ捨てる山田には、ふくよかな胸が2つついてい
た。

「アタシは上一級被魔師の霧隠 シュラ。日本支部の『危険因子』
の存在を調査するために 正十字騎士團、ヴァチカン本部から派
遣された上級監察官だ」

山田だった女性は、霧隠と名乗り、被魔師の免許証と階級証パッチを見せ
ながら言った。

嘘をついてる様子はない。が、上一級被魔師とは思いがたい態度だ

った。

「とりあえず、コイツとソイツを日本支部基地に連行する」

霧隠はそう言つと、燐とカナメの腕を掴んでどこかへと向かつて行くのだった。

目指すモノ

「皆さん、今日の任務はひとまず解散です。寮に戻って下さい……」

燐、カナメ、山田、杜山以外の塾生たちはメツフィーランド入口で集められ、雪男から解散の指示を受ける。

そこを横切るのは、霧隠に引きずられた燐とカナメ。それを追いかける杜山の姿があった。

「カナメはともかく、奥村は何かやらかしたんか？」

「あのお姉様、誰!？」

「あ!…あんだ!何が一体どうなってんの?」

皆、混乱していた。

霧隠は構わず進んで行く。

燐とカナメも、黙ってついて行くだけだ。

「ど…どこに行くんだ!？」

しばらく歩いて、メツフィーランド入口付近にあるスタッフ専用入口で足を止める。

燐は、こんな場所からどこへ向かうのか想像もつかなかった。

同伴している雪男が鍵を開ける。

ゆっくりと開いた先は、もうメツフィーランドではなかった。

広い空間。高い天井。長い道。

「ここは、正十字騎士団の中枢。日本支部は学園の地下を基地にしている。表向きは知らされていないけど、世界中に支部を持つ国際組織……ですよね？」

「ああ、そうだ。歴史も古くてな…2千年以上も大昔から世界中のバケモノ退治を担ってきたんだ」

長い道を進みながら説明していると、白とピンクが目立つ服の男の姿が見えてきた。理事長・メフィストだ。

霧隠に軽い感じに挨拶をする。

霧隠もメフィストを呼び捨てにして、言葉を遮った。

「本部に黙ってサタンの子とその血を引く者を隠しやがって…単刀直入に聞く。お前、一体何を企んでいる」

「企むなど滅相もない。確かに隠してはいましたが、全ては騎士團の為を思っていること…」

余裕の表情だったメフィストに気迫を感じた。
更に、こう続ける。

「サタンの子とその血を引く者を騎士團の武器として育て、飼い馴らす…！…この2千年、防戦一方だった我々、被魔師に先手を打つ機会を齎すものです」

メフィストは『綺麗に仕上げてから報告するつもりでした』と説明する。

霧隠は、どのみち本部には報告するらしい。

「その前に、コイツら尋問するから大監房を使わせてもらっぞ」

「…自由ごっつぞ」

「おい、チビっ子。お前からだ」

霧隠はカナメを指名する。

拒否権のないカナメはそれに従うだけだ。

引きずられるように連れて来られたのは、上級被魔師以上でなければ使用することができない監房。

重くて分厚い扉を閉めると、「ごおおお……ん……と音が響いた。

「さて、聞かせてもらおうか。お前、一体何者だ？」

「五十嵐 要です。今は候補生ですよ」

「『今は』？」

「特殊『称号』の被魔師候補。それが去年までのボクの肩書きでした」

「聞いたことはある。悪魔を自ら憑依させて、その能力で戦うという……」

「そう、それです」

最初から警戒していたが、カナメが憑依騎士だと認めた途端、更に警戒を増した。

「もう一度聞く。お前は何者だ？」

「ボクは、悪魔と人間の間生まれた混血児。母は陰陽師・五十嵐流38代目継承者…五十嵐 円。父は八候王の1人、嵐の王・セト」

カナメは、服の下からヒョロリと伸びた尻尾を見せながら言った。それは悪魔の証。

「憑依騎士の事を聞いた時、おかしいと思ったんだ。『人間』は“憑依できない”…！」

霧隠は体内から魔剣を召喚し、カナメに敵意を向けて構えた。

「確かにボクはサタンの血を引いていますが、あの人の野望とかどうでもいいんです。むしろ、母と同じ被魔師になりたいですし…」

「…被魔師の武器になってもか？」

「ボクの目標は、もっと先にあるんです」

「……………」

カナメに敵意はない。

体とは裏腹に、精神は『人間』なのだ。

父親譲りの紫の瞳は、敵意で満ちた霧隠を見る。

睨んでいるのではない。

ただ、優しい眼差しを送っているのだ。

「…しばらく監視させてもらっつからな」

「どっぞ」

「……………はあ」

霧隠は深い深い溜息をついて魔剣をしまう。

再び、重くて分厚い扉が開き、今度は燐と入れ替えられた。

「お帰りなさい」

メフィストがそう言って迎える。
側には雪男の姿もあった。

「バレちゃいました」

「それでシユラは何と？」

「しばらく監視するそうですよ」

メフィストは静かに『そうですか…』と呟いた。
雪男はカナメの姿が少し違っている事に気が付く。

カナメの服から飛び出す尻尾に気が付いたのだ。

「奥村先生、今まで1人での監視お疲れ様でした。…これからは、霧隠さんがボクを監視します。詳しい事は、理事長にでも聞いてください」

「…え！？フェレス卿！どういう事なんですか！！」

一瞬の間の後、詰め寄るように尋ねる。
メフィストは動揺した様子も見せず、ただ口の端を吊り上げて屁理屈をこねた。

「聞かれなかったので、言いませんでした」

「…まあ、この先も他の皆には内緒の予定なので、あまり現状は変わりませんよ」

「そういうトコロも父親と似ているな…」

「えー…」

カナメは、とてつもなく嫌そうな顔をしていた。

正十字学園町最上部、ヨハン・ファウスト邸。

「上への報告は保留にする。だが、奥村 燐と五十嵐 要の監視は続行する。…つーワケで、日本支部内にアタシの居場所を用意してくれ」

「…判りました」

広い部屋。

客用のフカフカした椅子には霧隠。

ホスト用のデスクと椅子にはメフィスト。

小さな机の上には、壺に活けられた草花と散乱したお菓子のクズやゴミ…。

霧隠は椅子に腰掛け、足を組んだ格好をしている。

メフィストは、それを注意することなく『正十字学園局地地震被害報告』と書かれたファイルを開いて、頬杖をついた格好で読み進めていた。

「何にせよ、日本支部（じふんぶと）としては貴女のような優秀な被魔師（じまし）がいてくださるのは大変心強い」

そう言われて、霧隠は軽く鼻で笑った。

「話は終わりだ」

「オヤもうお帰りですか」

紳士らしく、優しい口調で語りかける。

が、それが逆に変に思われたのか、霧隠はドアの前で足を止めてしまった。

「……メフィスト。」

お前、いったい何を企んでいるんだ？」

「…私は……人間と物質界の平和を企む者です。」

そのために、虚無界を捨て正十字騎士團（せいじゅうじきしだん）にいるのですから」

しばらく間が空き、霧隠はやはり鼻で笑う。

「お前が悪魔である以上、上はお前を信用してないって事を忘れるなよ」

冷やかな視線を送り、霧隠は出て行った。

翌日。

早朝5:00時。

「……………」

無言のまま体を起こす。
習慣になつた散歩に今日も出かける。

「……………はあ」

散歩中に出てくるのは溜息ばかり。
何故だか、不思議なくらい落ち込んでいた。
カナメはその理由がみつからず、更に溜息を吐いた。

「……………はあ」

「カナメ！」

「はえっ!?!?」

聞き慣れた声に振り返ると、勝呂が駆け足で近付いて来るのが見えた。
いつものように、Tシャツに短パン、耳からはイヤホンのコードが垂れている。

「お、おはよう!?!?!」

「ん。おはよう。…なあ、昨日のアレ、なんやったんや?」

「ちょっとトラブルがあつて…。それに巻き込まれたというか、突っ込んだというか……」

「はあ?」

カナメの説明に、勝呂は首を傾げる。

カナメ自身も今、何を話しているのか理解しきっていない。

「なんや…知らんのか」

「う、うん。まだ、ちょっと混乱してて……」

話が終わる。

気まずい空気から逃げるように、勝呂は再びジョギングを始めた。

いつもと同じはずなのに、何か様子が違う。

勝呂がそう思っているのと同時に、カナメも同じ事を思っていた。

「……はあ」

「…っわけで」

ほぼ下着のような露出の多い服を身に纏った、講師とは思えない霧隠の姿が教室内にあった。
教壇に腰掛け、ムッチムチの脚の網タイツがやけに色っぽい。

「この度、ヴァチカン本部から日本支部に移動してきました。霧隠シユラ、18歳です」

霧隠は『はじめましてー』と挨拶する。
とは言っても、元『山田』だ。

2ヶ月半、一緒に授業を受けていた人間である。

それは霧隠も軽く笑いながら昔話のように語る。

「えーと？とりあえず“魔法円・印章術”と…？“剣技”もかよ、めんどくせー！

…受け持ちますんで、よろしくー」

霧隠は、何もなかったかのように話を進めるが、勝呂が気になって
いる2つの質問を挙げる。

“何故、生徒のフリをしていたのか”。

“魔印の担当だったネイガウスはどうしたのか”。

霧隠の答えは、どちらも“大人の事情”だった。

もちろん納得いくはずもなかったが、話を遮るようにか細い声が割
り込んでくる。

「スンマセン……。その…ブツブツ、ブツブツ……」

一生懸命、言い訳をしている隣に、霧隠は入室を促す。

霧隠が教室にいることを驚いていたが、すぐに着席と教科書の朗読
を命じられ、言われた通りに行動した。

「何か雰囲気変わったんやないか？」

「…何かあったんかもしれませんがねえ」

「志摩くんが考えてるような事はなかったと思っよ」

「カナメちゃん、ヒドイ…」

「私語は謹めー」

他愛のない日常。

これが普通の日常。

例え、己を偽り、他人に嘘をついた偽物でも、それが普通ならば守る。

そう考えるカナメとは逆の事を、実行しようとしている者がいるとは、今はまだ考えてもいなかった。

それ以上、何も語らなくなった父親の背中……。幼いながらに感じる『恐怖』に、体を震わせ父に尋ねる。

尋ねる声も震えている。

「ボクは…普通じゃないの？なんで、尻尾が生えてるの？ボクは何なの！？」

「…お前は、選ばれた。………が………の………」

「嘘だ！ボクは………被魔師になるんだ！ボクは、悪魔なんかじゃない！！！」

「……………また……………」

カナメは、うんざりした様子で乱れた髪をかき上げる。

「最近、多いなあ…。 “憑依”^{ちから}の使いすぎかなあ」

被魔塾に入ってからというものの、やたらと“憑依”を使う機会が増え、その度に動けなくなる。あまりにも機会が多いためか、体が“憑依”に慣れ始めているくらいだ。

「ところで…」

とりあえず、ズボンを履き替え、上着を着替えながら部屋の隅で悔し涙を流す男に声をかける。

「勝手に入っていきけないでください。てか、アマイモンから目を離さないでくださいよ…」

「あいつなら大丈夫です。私の知人に頼んであります……………しくしく（ノ…）」

「今度はどうしたんですか？ボクのスコアが越えられないとかですか？」

「……はい。テトオスの」

「……はあ」

溜息を漏らすカナメ。

しくしくと泣き続けるメフィスト。

今回は、そんな2人が初めて会った時の話を振り返りたいと思う。

あれは、10年程前。
まだカナメが幼稚園に通っていた頃の話。

「悪魔の子だ」

「おそろしい」

「五十嵐流も堕ちたな…」

幾多の小声の罵倒が、幼いカナメを襲う。
大人達が、何故冷たい目で見るのか、冷めた口調で話すのか…いくら悩んでも答えは出て来ることはなかった。

上一級被魔師であり、五十嵐流陰陽師継承者であり、母だった円^{マドカ}。
彼女が愛したのは、セトという名の神だったもの。
カナメを身籠るまで、悪魔である事は隠していた。

マドカは、カナメを産んですぐ死んだ。
体が弱かったせいなのか、悪魔としてカナメを産んだせいなのか…。

何が善くて、何が悪い事なのかも分からない幼子に、親類や他の陰陽師からは冷たく扱われた。

しかし、陰陽師の能力は天性の才と讃えられた。僅か3歳で式神の召喚。

特に、風を操る式神の召喚はマドカ以上と謳われた。

そして…もう一つ。

悪魔が必ず行つた“憑依”も幼くして力を発揮していた。

母親の姿も見えていた。

それが^{ゴースト}霊だとは思ってもせず、母親として慕い続けていた。

「お母さん！今日ね“しらぬい”と遊んだの。“かまいたち”はね、今日はなんだか元気がなかったんだ…」

目の前の母親に声をかける姿は、他の子供達には『変』に見えた。被魔師や陰陽師達には見えているが、それ以外には見えないモノ。

だからこそ、子供達からも大人達からも遠ざけられ…いつも1人だった。

「あ、お父さん！」

悪魔の父親。

それだけで、人々は恐怖した。カナメも同類であると、勝手に決め

た。

「その人、だあれ？」

白とピンクの印象的な服に、それに合わせたような帽子と傘。目つきは悪く、目の下のクマは寝不足を遥かに超えているようだった。

「初めまして 私はメフィスト・フェレス。このセトの兄です」

「お父さんの…お兄ちゃん…？」

「はい」

父が連れて来た人物に、違和感を感じていた。人とは違う、父に似た異様な雰囲気や幼くして肌で感じ取っていた。

「あなた達に会えて、嬉しく思いますよ。まさか、悪魔に憑依出来る人間がいるとは思いませんでした」

メフィストはカナメを見つめて語りかける。当の本人は、戸惑いを隠せず父親の足に隠れた。

その様子を見て、クスツ…と笑う。

「あまり娘をイジメないでやってくれないか。見ての通り、この子は人見知りでね……自分で召喚した使い魔しか友人はいないんだ」

「ほう…もう、召喚が出来るのか。今、どのくらい友達がいるのかな？」

「……」

カナメは、小さな指をパツと開いて見せた。
両手で。

さすがのメフィストも、それには驚いた。
わずか6つの幼子が使役する使い魔の数には多過ぎるからだ。

「素晴らしい！将来が楽しみですね」

「ボク、えくそしすと？になるの！それでね、みんなを笑顔にした
いんだ」

「その時は私の所に訪れなさい。君を立派な被魔師にしてあげます
よ」

メフィストは別れを告げ、五十嵐流の本堂に向かって行った。父はそこで見送り、カナメと共に離れにある屋敷へと帰る。

その帰り道でカナメは尋ねた。

「お父さん、あの人…ボク達が見えてるの？」

「そうだよ。彼にはお前達が見えている。人間には見えない、私達しか見ることができないモノがね……」

カナメは、ふうーん…と素っ気ない返事をする。意味を理解仕切れていないと悟ったのか、セトは笑うのを押し殺していた。

「お母さん、どうして泣いてるの？」

「…そうだな。その“時”は近いようだよ、マドカ」

「？」

カナメを挟んで会話する両親を、訳も分からず見上げて首を傾げる。

この時は、まだセトが言った“その時”というものが迫って来ているなどと気付きすらしなかった。

その頃、本堂では…

「では、皆様の決断は“ソレ”でヨロシイのですね？」

メフィストの言葉に、本堂に集まった親戚一同は無言で頷く。

その中の代表者と思われる男が立ち上がり、メフィストに宣言する。

「我々の一族に悪魔はいない。あの子の存在は、消さねばならない
」！」

「分かりました。では、あの子は『悪魔』として我々が対処しまし
よう。

……最後にお尋ねしますが、本当にヨロシイのですね？」

「ああ。

我々の意志は覆らない！」

メフィストは“分かりました…”と呟いた。

“その時”がカナメ達に近付いていた：

それを察知したのか、セトが動いた。

カナメを避難させる為、一次的に異空間への扉を発動させる。

「お母さん!？」

マドカが頭を抱えて倒れ込む。

外からは、お経のような声が訝こたまのように聞こえてきていた。

「稲荷の神々に崇められし、尊きモノに畏み申す！我、風の者！
汝の炎の糧にならん!!」

札のような物に文字が書かれている。

カナメが召喚を行うと、そこから火炎の渦を巻きながら、九本の尾
がついた白銀の狐が降り立った。

「お母さんをイジめるなあ！！」

カナメは声が聞こえる方に向かって叫んだ。

狐は、その声に導かれるように、巨大な炎の玉を吐き出す。

炎の玉は渦を描きながら球体を保ち、外にいた黒服の男達に命中する。

その男達の後方には、つい先程見たことのある男がいた。

先程とは違う笑みを浮かべながら、再び立ち上がる男達を誘導してお経を唱え始める。

「炎孤えんこ！」

カナメは、もう一度炎の玉を放つ。

先程よりも強力に見えたが、一瞬にして消滅する。

おそらく、聖水の類だと思われるがカナメには不思議でしかなかった。

「カナメ、お前達はあっちに行つてなさい」

セトは、やや強引に突き飛ばす。

小さくて軽い体は、吸い込まれるように異空間へと飛ばされた。

「マドカ、あの子達を頼む。

君の事は、今でも愛しているよ」

『行け』と言われ、かつての夫と別れる。

その眼には涙が光っていた。

せめて、夫の願いを叶えようとマドカも異空間へ向かう。

だが、その体はカナメの目の前で消え去った。

雲が風で掻き消されるかのように、何の予兆もなく、突然に……。

「……………っ!!!!!!」

カナメの声にならない叫びが訝する。

誰かが唱えた致死節がマドカを消滅させてしまったのだ。

「…自分達で自分達の首を絞めているのにも気付かぬか。
とは、浅はかだな。では、メフィスト、後は頼んだぞ？」

人間

「ええ」

「我が名はセト。神と崇められ、悪魔へと堕ちた嵐を起こす者……」

セトは大きく両手を広げ、親類一同を風で舞い上がらせる。
風などと生易しいものではない。

もはや、暴風 嵐と言ってもいいくらいである。

そんなモノに舞い上げられたたかが人間が無事な訳がない。揉みくちやにされた人間達を引き連れて、セトはゆっくり異空間へと移動していった。

そこに残るのは、メフィスト、フェレスと正十字騎士團の姿と、嵐という暴風に荒らされた建築物だった物の成れの果て。

先程まで、そこに八候王の一人である嵐の王がいたとは思えない程の静けさに、騎士團は冷や汗が止まらなかった。

「皆さんご苦労様でした。『悪魔3体の排除』完了です 解散してください」

「は、はい…。各自解散！フェレス卿はいかがされますか？」

「私はまだ用があります。しばらくは、この敷地内に入らないようにしてください。」

命の保証はしませんよ？」

「はっ！」

騎士團の人間はいなくなり、日も堕ちて尚、メフィストの姿はまだ

そこにあつた。

あの子達の帰りを待っているのだ。
異空間に消えた、将来有望なあの子達を…。

あの子達は、ちゃんと戻つて来た。

ただ、カナメの記憶には残ってはいなかった。

それから10年。

何も思い出せないまま、カナメはメフィストの元に訪れた。
被魔師になるために…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1138x/>

青の祓魔師～紫眼が見つめるモノ～

2011年11月9日01時05分発行